宇都宮大学国際学部研究論集 2005, 第 20 号 , 15-28

開発と文化の調和と対立

―― タンザニア南東部における地域・ジェンダー・世代 ――

阪本公美子

Ⅰ. 序
Ⅱ. 方法論
Ⅲ. リンディ州農村における開発と文化の認識
Ⅳ. 地域・ジェンダー・世代
Ⅴ. 結論

Ⅰ. 序

開発と文化の関係については、様々な視点が存在する。開発と文化の調和を重視し、文化を開発（発展）の土台と見なす内発的発展の視点（鶴見 1996）から、開発に抵抗する文化としてのモラル・エコノミー（Scott 1976）や、文化を開発の促進（場合によって阻害）要因と見なす社会関係資本（social capital）の概念（Putnam 1993）まで、多種多様である。

ここでは、文化に根ざした開発を目指したウジャマー制度が独立後採用されたにもかかわらず、現在の開発の現場において、文化が往々にして阻害要因として見なされているタンザニアを取り上げる。本論文では、まず、タンザニアにおいて、開発と文化の関係がどのように議論されてきたのか、特徴的な先行研究を整理する。その上で、そこから導き出される問題を念頭に置き、リンディ州の事例研究を用いて、コミュニティにおける「開発」と「文化」の概念化、及びその地域的特徴と、ジェンダー・世代による差を明らかにする。

開発と文化が調和しているとみなす先行研究

タンザニアは 1961 年の独立以降、概念上、文化を土台とした開発を強調した。初代大統領であったニエレレは、「文化」が開発を促進するものと見なした。例えばニエレレは、文化が国家の中心的な精神を表すものであり、「全ての部族の伝統や慣習の長所を生かし国民国家を形成してゆきたい」（Nyerere 1966, pp.186-187）と示した。更に、彼は、富を分かち合い、年長者を敬う「伝統的な」アフリカの拡大家族関係によって触発されたウジャマー制度のもとでアフリカ的社会主義を促した。1967 年のアルーシャ宣言では、これらの概念と関連し、農業に基づく自助努力が強調された。同年、本宣言に基づき、自助努力のための教育とウジャマー村の形成が打ち出された（Nyerere 1968）。ニエレレが示したこの路線は、世界の注目を集め、ハマーショルド財団による「もうひとつの発展」のモデル事例としても引用された（Hammarskjöld 1975）。

タンザニアにおける現在の開発の現場における議論では、文化が開発に貢献するという視点もある。この視点は、開発の媒体となる社会ネットワークを分析する社会関係資本の研究にも見られる。タンザニア各地で行われた世界銀行の社会関係資本の調査は、教会やモスク、葬式等における相互扶助組織、女性グループ、政治的組織などが開発に貢献していると示した（Narayan 1997）。また、シニャンガ州で行われた参加型貧困分析においても、自警団、町内会、儀礼（ngoma）[1]で踊るグループなどが、開発に寄与していると指摘された（Shinyanga 1998）。

しかしながら、ニエレレの概念も、社会関係資本の概念も、異なる意味で現実に即していないと考えられる。前者は、伝統的な文化を巨視的かつ概念的に認識し、「伝統的なアフリカ文化」を一般化する傾向があり、タンザニア内における文化の多様性を認識していなかった。後者は、近視眼的かつ局地的な視点であり、文化の一部分を開発に貢献するかどうかによって判断し、文化の包括的な理解を失う可能性が高い。これらの欠点が、現

[1] Ngoma は、スワヒリ語で、太鼓、太鼓と踊りを伴う儀礼・祭を意味し、この場合、後者を指す。

在の開発の現場における議論において、「文化」が開発の阻害要因とみなされる原因である可能性が高い。

文化と開発の対立に焦点を当てた先行研究

開発と文化の調和として宣言されたウジャマー政策は、経済的・社会的・文化的に失敗であったと繰り返し批判されてきた。ウジャマー政策の一環であったウジャマー村落化計画は、人々の文化に考慮した自助努力の概念から程遠かった。ニエレレは当初、国民がウジャマー村を自発的に形成することを期待したが、期待が裏切られたため村落化の多くは強制的に行われた。スコット（Scott 1998）によると、人工的なウジャマー村に移動させられることによって、もともと自立した農民であった多くの人々は、土地や文化に根付いた習慣・知識を失い、人と人との繋がりを破壊され、単なる労働者におとしめられた。他方、ウジャマー制度は、国という範囲よりも強い繋がりである文化に基づいた「情の経済」に阻まれたため、農民を掌握しきれなかったといった議論もある（Hyden 1980）。現実は、タンザニア国内において一様ではなかったが、ニエレレが伝統的な文化の多様性を認識せず、多くの国民の土着の文化を軽視したことは確かであり、このことは、イスラムの影響を強く受け、母系社会といわれている本論文の調査地リンディ州など南東部では、なおさらであった。

タンザニアの現在の開発の現場における議論では、阻害要因として文化を認識している例はふんだんにある。例えば、女性と子供の福祉に焦点を当てた調査では、女子割礼、結納金、若年結婚、食べ物に関する迷信、一夫多妻、土地相続に関する不平等な権利、男性による過度な飲酒などを、「文化」に関連した阻害要因と見なしている（UNICEF 1995, 1997; Mbilinyi, Koda, Mung'ong'o, & Nyoni 1999）。

貧困に焦点をあてた調査では、文化が開発を促進する点とともに、阻害する点も挙げている。貧困と関連するいくつかの文化慣習の例としては、食糧と時間を無駄にすると見なされる儀礼、男女分業を硬直化する家父長制、男性による過度な飲酒、土地利用と投資を阻む呪術に対する恐れなどが挙げられている。これらの例を文化による阻害要因とみなす例は、学術的な研究（Mesaki 1999）、参加型貧困分析（Shinyanga 1998）、貧困指標を選択した州・県レベルの協議（Tanzania 1999）[2]、貧困削減戦略書（PRSP）（Tanzania 2000a, b）など、多岐に渡って見られる。

問題設定

文化を開発の阻害要因と見なす視点に対する批判も主張されてきた。ウェンバ・ラシード（Wembah-Rashid 1998）は、「開発論者」が往々にして、文化と開発の複雑な関係への考慮なく、「文化」によって社会の「改善」や「転換」が妨げられていると考える視点を批判する。M. スワンツ（M.Swantz 1996）は、文化的慣習への執着が、「開発」に対する遅れた対応ではなく、人々が自らの場を創造する方法であると分析する。更に彼女（M. Swantz 1981）は、文化を社会的・政治的・経済的変化と関連して調査し、人々自身の文化的な資源が、自らの進歩と発展のための源になるべきこと、そしてなり得ること示した。本論文は、これらの先行研究に見られるような「文化が開発の基盤である」という認識を共有しつつ、タンザニア南東部リンディ州の農村の人々の視点に基づいて開発と文化の関係を再検討する。

開発と文化の認識は、性別と年齢によって異なる。タンザニア中北部マラ州タリメ県では、年配の男性が、「文化」を守るのに必死であり、社会の要であると考えていた女子割礼の存続を強調した（UNICEF 1995）。一部の女性は女子割礼を許容していたが、表立って反対する女性もいた（UNICEF 1995; Mbilinyi et al. 1999）。貧困削減戦略書（PRSP）作成の過程における協議においても、多くの女性は、女性の権利を妨げる様々な伝統的な慣習に対して批判的であったが、男性はほとんど主張しなかった（Tanzania 2000a, b）。また、女性はグループとなって自らの福祉を改善する戦略を行なっていたが、それらのグループは、「文化」に根ざす組織から、「開発」のために集まったグループまで様々であった。個人として経済活動を行っ

[2] 筆者は、国連開発計画 (UNDP) に勤務中の 1997-1999 年の間、貧困指標を選択する協議等のプロセスに参画した。

表１　調査地の特徴

州	リンディ						
県	ﾙｱﾝｸﾞﾜ		ﾅﾁﾝｸﾞｳｪｱ	リンディ（農村部）			
地区	ムベケニェラ		ナイパンガ	ルタンバ		スディ	ムチンガ
村	ﾑﾍﾞｹﾆｪﾗ	ﾅｳﾅﾝﾍﾞ	ﾅｲﾊﾟﾝｶﾞ	旧ﾙﾀﾝﾊﾞ[a]	新ﾙﾀﾝﾊﾞ[a]	ｽﾃﾞｨ	ﾑﾁﾝｶﾞ・ﾑﾋﾞﾘ
地域	内陸		内陸	内陸		海岸沿い	海岸沿い
設立年	1974		1968	(1974)		(1972)	(1977)
設立以前	新村[a]		個人・世態が離れて住居	ﾙﾀﾝﾊﾞ 村として、昔から村として存在		昔から村として存在	
人口(1988)	2132	2039	5066	2424	3666	2209	2254
民族グループ	ﾑｳｪﾗ		ﾏｺﾝﾃﾞ，ﾑｳｪﾗ，ﾏｸｱ（ﾔｵ）[b]	ﾑｳｪﾗ	ﾑｳｪﾗ（ﾏｺﾝﾃﾞ，ﾔｵ）[b]	ﾏｺﾝﾃﾞ（ﾆｬｻ，ﾔｵ）[b]	ﾑｳｪﾗ+ﾏｺﾝﾃﾞ＝ﾏﾁﾝｶﾞ
宗教	伝統宗教						
	イスラム教（キリスト教）[b]		イスラム教、キリスト教	イスラム教	イスラム教（キリスト教）[b]	イスラム教（キリスト教）[b]	イスラム教
地域	内陸		内陸	内陸		海岸沿い	海岸沿い
生業	農業		農業	農業		漁業・農業	漁業・農業

注：[a]本調査においては一村として扱う、[b]（　）＝少数の民族・宗教など
出典：2001年7-8月のフィールド調査による

た場合、その利益を夫に横取りされるかもしれないため、グループとなって野菜を栽培する「開発」のための戦略から（M. Swantz 1998）、男性の手が及ばない文化的な儀礼に関連する組織を利用する戦略まで（Mbilinyi et al. 1999）存在した。本論文は、このような老若男女の多様な主体を、開発と文化の概念化によって比較する。

II．方法論

調査地

本論文は事例として、タンザニアの中でも、その「文化」のために「貧困」状態にあるという偏見が持たれている東南部に位置するリンディ州を取り上げる[3]。「貧困」の概念は多様であり、有限の指標によって順序づけすることはできないが、タンザニア政府が選択した貧困指標によると、リンディ州は、最も貧しい州のひとつとして分類されている（Tanzania 1999）。更に、貧困指標を選ぶ協議において、リンディ州を含むいくつかの州（ほとんどが海岸沿いの州）の行政官は、「文化」が貧困を促進しているため、文化に関連する指標が必要であると主張した（Ibid.）。このように、文化が開発の阻害要因となっていると考えられている典型的な州として、リンディ州をとりあげる。

リンディ州は、面積67,000平方キロであり、タンザニアの南東部、ムトワラ州の北に位置する。現在、リンディ都市部、リンディ県（農村部）、キルワ県、リワレ県、ナチングウェア県、ルアングワ県の６つの県等から成り立ち（Tanzania 1997b）、2002年の国勢調査によると、人口971,306人である（Tanzania 2003）。リンディ州の内陸では、ルワングワ（Ruangwa）県ムベケニェラ（Mbekenyera）村、ナチングウェア（Nachingwea）県ナイパンガ（Naipanga）村、リンディ（Lindi）県（農村部）ルタンバ（Rutamba）村３村、海岸沿いでは、リンディ（Lindi）県（農村部）スディ（Sudi）村、ムチンガ・ムビリ（Mchinga II）村の２村、計５村において調査を行った。（各村の特徴については表１、位置については地図１参照。）

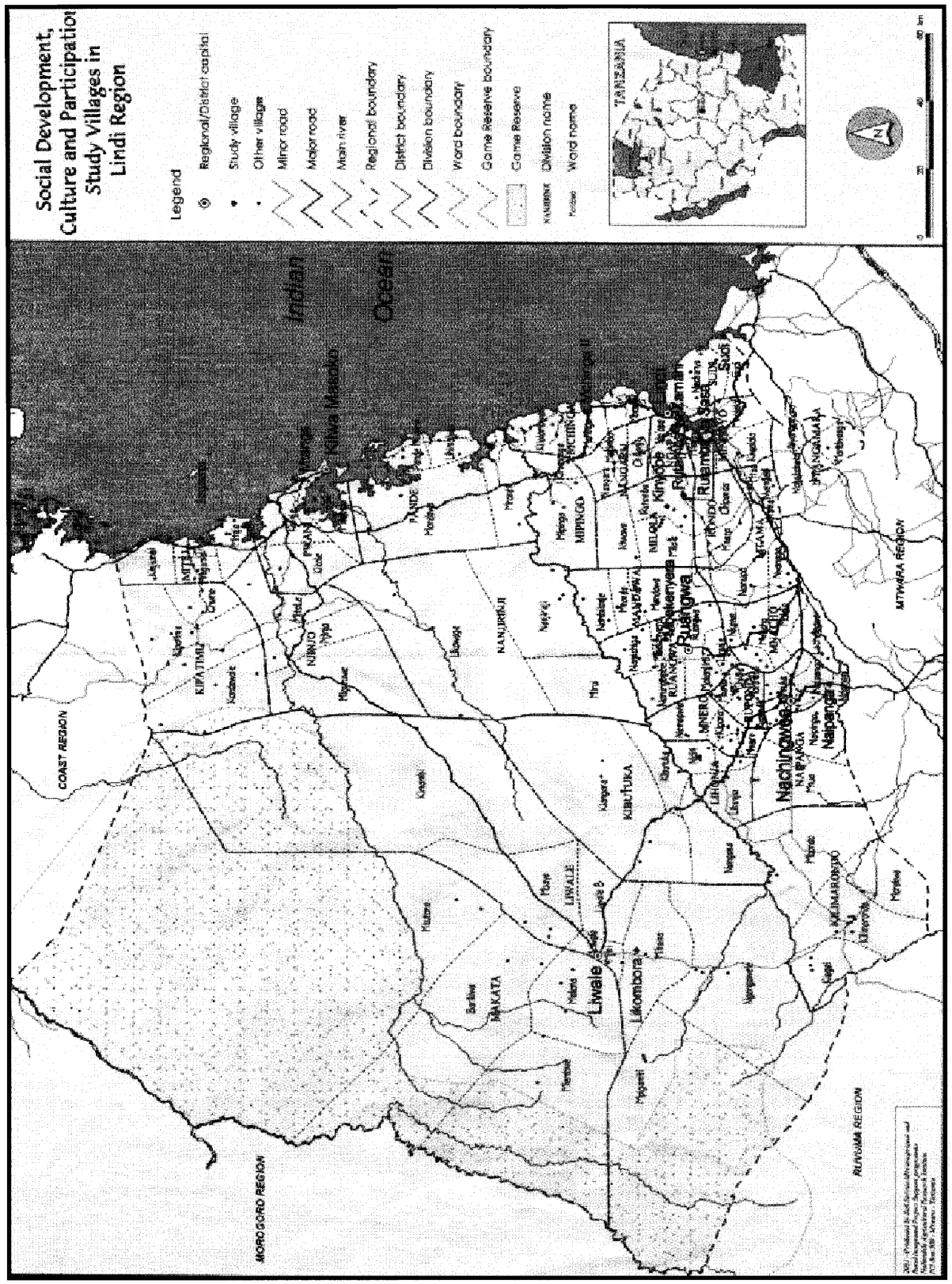
時期と内容

本調査の原点は、1994～1999年の間、筆者がタンザニアの国連機関における勤務中の観察にある。2000年以降は、研究者として、まず2000年８月及び2001年2-3月に資料収集や有識者に対するインフォーマルなインタビューなど、タンザニアにおける事前調査を行った。2001年7-8月に、ダルエススラーム市、ムトワラ市、リンディ市において有識者に対するインフォーマルなインタビューや資料収集を経て、リンディ州の農村においてグループ討論やインタビューを含むフィールド調査を行なった。

フィールド調査のうち本論文と直接関連する内容は、「開発」と「文化」に関する性別・年齢別グループ討論である。具体的には、以下の点につい

[3] リンディ州を含む海外沿いなどスワヒリ文化の影響が強い地域において、歴史的に貧困が形成された議論については、阪本（2004）を参照。

地図１　リンディ州及び調査地



出典：Soil Service Mtwara project and Rural Integrated Project Support programme 作成.

表２　グループ討論参加者及びインタビュー回答者の数

県	性別 / 村 / 年齢	グループ討論参加者 女性 15-40s	女性 50-	男性 15-40s	男性 50-	計	インタビュー回答者 女性 15-29	女性 30-49	女性 50-	男性 15-29	男性 30-49	男性 50-	計
ﾙｱﾝｸﾞﾜ	ﾑﾝﾍﾞｹﾆｪﾗ、ﾅｳﾅﾝﾍﾞ	9	7	12	11	39	1	9	6	1	10	11	38
ﾅﾁﾝｸﾞｳｪｱ	ﾅｲﾊﾟﾝｶﾞ	10	9	11	10	40	4	7	8	2	9	10	40
リンディ（農村部）	ﾙﾀﾝﾊﾞ	10	8	10	10	38		9	6	1	8	9	33
	ｽﾃﾞｨ	7	7	10	11	35	4	4	6	2	7	15	38
	ﾑﾁﾝｶﾞ・ﾑﾋﾞﾘ	10	9	10	9	38	6	4	8	0	9	11	38
小計		46	40	53	51	190	15	33	34	6	43	56	187
ｷﾙﾜ							3	1	0	2	3	1	10
リンディ（都市部）							14	1	0	0	5	8	28
ﾀﾞﾙｴｽｻﾗｰﾑ市							5	6	2	3	4	3	23
計（性別・年齢別）		46	40	53	51	190	37	41	36	11	55	68	248
合計（性別）		86		104			114			134			

出典：　2001 年 7-8 月のフィールド調査による

てグループ討論を求め、個人に対するインタビューにおいても同様の質問をした。

1. maendeleo（開発）と utamaduni（文化）の定義と決定者
2. 以下の状況が可能かどうか。可能ならば具体例を複数列挙し議論した後、最も重要な例を選択。
   (a)　開発と文化の調和
   (b)　文化が開発の阻害要因となる事
   (c)　開発が文化を害する事

調査者と調査対象者

本調査のグループ討論は、筆者及び参加型農村調査（PRA: Participatory Rural Appraisal）に関する訓練を受けたといわれているタンザニア人ファシリテーターと協同で行った。これらのファシリテーターは、リンディ州とムトワラ州におけるフィンランドの援助の影響もあり、インフォーマルな形ではあるが、数人、各県で確保されている。20 グループの討論のうち 14 グループでは、参加者と同じ性別のファシリテーターが担当した。

調査地である５村におけるグループ討論には、年齢と性別を考慮し、それぞれの村において約 40 名の村人が参加した。年齢と性別は偏りがないように、年配（50 歳以上）の女性・若い（15 歳～40 歳代）女性・年配の男性・若い男性、各グループ約 10 名程度参集した。それぞれのグループにおける希望人数から約３名までの誤差が生じ、結果として合計 190 名の老若男女の村人が、20 のグループに分かれて討論した（表２）。

上述５村では、グループ討論に参加した 190 名のうち 187 名の老若男女に、筆者やファシリテーターがインタビューを行なった。比較のために、リンディ州キルワ県、リンディ都市部、ダルエスサラーム市において、筆者がインタビューの意図について説明をした上、質問票に基づくインタビューを委託した。インタビューにおいてもなるべく偏りがないように、性別と年齢に関する考慮した。その結果、リンディ州農村及び都市、ダルエスサラーム市において合計 248 名の老若男女の人々にインタビューを行なった（表２）。インタビューのうち 72% のインタビューが、質問者と回答者の性別が同一であった。

調査方法

リンディ州における本フィールド調査は、グループ討論（インタビューの一部及び観察）に基づく定性的方法と、構造的なインタビューによる定量的な方法を、ともに採用した。その中でも、社会的な背景や変化に関する説明を理解するために、グループ討論に基づく定性的な調査を重視した。そのため、グループ討論における性別・年齢の比重には注意を払ったが、インタビューのサンプルが統計的有為であるかどうかについては、二次的な扱いをした。

グループ討論は、PRA の方法論を参考にし、知識は人々が所有しており、人々の知識を分けてもらうという姿勢で、調査を行なった。また、その知識・情報を、本論文執筆のために持ち帰るだけでなく、村にその記述の現物を残し、それぞれの県・リンディ州政府、援助機関、タンザニアの研究者

や関連中央政府などに、村の声を政策決定者に伝達するという意図で要約を報告した。但し、質問票については個人情報を含むため、匿名で集計した結果のみ後日報告した。インタビューは、ほとんど口頭で行い、それぞれの質問者（筆者を含む）が質問票にスワヒリ語で記した。回答者が問題なく記述できる場合のみ、回答者が直接、スワヒリ語で記述した場合もある。インタビューの回答は、筆者が入力・累計・分析・英（和）訳した。

本論文では、開発と文化に関するグループ討論の結果を、インタビューの結果、季節・一日の作業に関するグループ討論の結果、観察、関連文献、インフォーマルなインタビューから入手した情報、筆者の経験等と照らし合わせ、分析した。[4]

Ⅲ．リンディ州農村における開発と文化の認識

ここでは、リンディ州の農村に暮らす人々がどのように開発と文化を定義し、それらの関係を捉えているかを議論する。開発と文化の関係は、(a) 調和、(b) 対立その１：「文化」を開発の阻害要因とみなす視点、(c) 対立その２：「開発」が文化に害を及ぼすとみなす視点、以上３視点に分類した。

村人よる開発と文化の定義

グループ討論及びインタビューにおいて、「文化（utamaduni）」と「開発（maendeleo）」の定義、およびその規範を規定する者について尋ねた。

「開発（maendeleo）」は、ほとんどの場合「低い・悪い状態から高い・良い状態に変化すること」と定義されていることが共通していた。具体的な例としては、所得、生産活動（特に農業に関連した活動）、社会サービス（保健医療と教育）、住居、安全な水、交通手段、環境状態などが挙げられた。20 グループ討論のうち、５グループが、農業を例に挙げた（ムベケニェラ村の女性の老若２グループ、ナイパンガの男性の老若２グループ、ルタンバ村の年配の女性）。インタビューにおける自由回答の質問に対して、開発の最も頻繁な例は所得（39 人、複数回答）と社会サービス（30 人、複数回答）であった。グループ討論の内容とインタビューの回答を比較すると、グループ討論では、集団農業などの協同作業を含んだが、個人で問われた場合、所得や社会サービスなど個人の利益に関するものが多かった。多くの参加者が、彼ら自身が開発について決定すると述べたが、いくつかの女性グループは、「男性」や「政府」が開発について決定すると述べた。

「文化（utamaduni）」は、多くの場合「昔から祖先が行ってきたことがら」と定義され、「慣習や習慣（mila na desturi）」と類似していると、グループ討論及びインタビューにおいて説明されたことが共通していた。文化の内容は、生活に関する慣習や習慣と関連づけることが多かった。最も典型的な例は儀礼であり、特に男女の成人儀礼であるジャンド（jando）とウニャゴ（unyago）がしばしば語られた。他の「文化」の例としては、農業や料理のための伝統的な器具や、伝統的な方法で作った籠・敷物・ベッドなどを、特に年配者が挙げた（ムベケニェラ村の女性、ナイパンガ村の男性、ルタンバ村の女性）。以上のように定義・例示された「文化」は、祖父母や父母から教わった、とグループ討論のほとんどで示された。更にインタビューにおいては、男性が母親から学ぶことも目立ったが、同姓の祖父母や父母から教わっていることが主であった。

(a) 開発と文化の調和

開発と文化の調和が可能かどうか、という問いかけに対して、全ての 20 グループが可能であると答えた。ここではそのグループ討論の結果を、インタビューで補足・確認する。

グループ討論とインタビューと共通して、開発と文化が調和している例として最も頻繁に挙げられたのは、農業であった。グループ討論の中で、20 グループ中７グループは、いくつかの例を挙げた後、その中の農業を、開発と文化の調和を表す最も重要な例として選んだ。農業が開発と文化の調和例として挙げられた事は、これまでアフリカにおける農学や文化人類学的な先行研究（Sokoine 1998, 掛谷 2002, 杉村 2004 等）に呼応するものである。

例えば、協同労働による農業（mikumi）は、文

[4] 調査方法の詳細については、Sakamoto (2003) を参照。なお本論文は、Sakamoto (2003) において発表した調査データの一部を用い、再分析したものである。

化に基づいた開発を表す例として説明された（ムベケニェラ村の男性老若２グループと若い女性グループ、ムチンガ・ムビリ村の年配の男女２グループ）。他の例としては、農業器具の改善が、伝統的な農業器具があったからこそ可能であったことを、特に若い男性は説明した（ナイパンガ村及びルタンバ村）。

調査農村における生業や職業について問うと、ほとんど全ての参加者は、漁業を行っている場合でも、「農民（mkulima）」と名乗った。海岸沿いのスディ村の若い男性たちは、農業をしながら漁業をする者はいるが、漁業のみを生業とするものはいないと主張した。村人が、漁業より農業を強調する原因としては、農業を強調してきた国の政策が影響していると考えられる。

グループ討論において次に最も頻繁に例示されたものは、儀礼であり、インタビューにおいては最も頻繁に述べられた。20グループ中６グループが儀礼を選び、それらのグループの中で４グループが男女の成人儀礼を挙げた。

ジャンドとウニャゴなどの成人儀礼において、男女は、年長者を敬うことや、結婚生活について学ぶ。男性は、ジャンドを通して家の建て方や、それぞれの環境の中で必要な生活の知恵を学ぶ。女性はウニャゴを通して、家事や男性の扱い方を学ぶ。元々、ジャンドはイスラム教と関連しており、民族集団を超えて行われていたが、ウニャゴは、それぞれの民族集団（kabila）や氏族（ukoo）において行われていたと考えられていた（M. Swantz 1970）。しかしながら、本調査のインタビューにおいて、スディ村の女性３名が、独立後、ウニャゴが村ごとの開催へと変化したと述べていた。リンディ州においては、男女ともに、ジャンドやウニャゴを経なければ成人とみなされず、社会において男性・女性として認められるためには、必要な過程であった。しかしながら、ジャンドとウニャゴの評価については、後述の通り村人の中でも議論がある点であった。

ナイパンガ村の年配の男性グループは、夕食後、子供たちと話をすることが、文化的な知識・習慣・マナーを後世に伝えるために最も重要であり、そのことによって開発と文化が調和しうると強調した。

他の例としては、結婚式、敬意とマナーを学ぶ事、保健医療サービスの改善、相互扶助（葬式を含む）などが挙げられた。

(b) 開発と文化の対立例その１：開発の阻害要因としての「文化」

「文化が開発の阻害要因になりうるか？」という質問に対して、20グループ中19グループが「なりうる」と答えた。ルタンバ村の年配の女性グループは、開発は自らが自発的に行なう改善であり、彼女たちは日々学び、開発の阻害要因となりうる文化の欠点を刷新してゆくため、文化が開発の阻害要因にはなりえない、と主張した。

「儀礼」、特に「ジャンドとウニャゴ」は、開発と文化の調和の例として挙げられていただけでなく、開発と文化が対立する例としても挙げられた。20グループ中14グループは、開発を阻害する例として儀礼が最も影響的であり、それらのグループのうち８グループが特に成人儀礼のジャンドとウニャゴを特定した。典型的な批判は、これらの儀礼が、食糧・所得・時間を過剰消費するとともに、子ども達がその間学校に行けなくなる、といったものであった。このような反省もあり、実際、儀礼の期間を短縮した村もあった。

男子のためのジャンドでは、割礼が行なわれ、治癒するために村から数ヶ月間離れた場所で過ごす必要があった。しかし、割礼の技術が改善したため、その期間が短くなり、病院で割礼を済ませる例も近年は見られるようになった。ルタンバ村の全体討論では、女子のためのウニャゴにおいて、必ずしも女子割礼を行なうわけではないことが強調された。インタビューでは、女子割礼の有無に関する選択式の質問に対して、177名の有効回答のうち86名が存在すると答え、85名が存在しないと答えた。存在すると答えた回答は、リンディ都市部とダルエスサラーム市に多く、グループ討論を行なったリンディ州農村部では比較的少なかった。女子割礼が行なわれていると答えた者のうち、75%が「悪い」慣習であると答えた。ちなみに、リンディ州で女子割礼が行なわれている率を1.9%、ムトワラ州で行なわれている率を2.9%と報告している調査もあり（Tanzania 1997a）、全国的に比較すると少ない。

インタビューのうち自由回答の質問では、ジャンドとウニャゴを、開発を阻害する文化の例とみなす回答が多く、グループ討論の結果を確認した。しかし、選択式の質問では、ジャンドを行なうと答えた160名の有効回答のうち74%、ウニャゴを行なうと答えた155名の有効回答のうち66%が、それらを「良い」習慣であると答えた。グループ討論の中でも、同じグループが、ジャンドやウニャゴを、開発と文化の調和とともに対立の例として並列していた（ムベケニェラ村の若い男性グループ、ナイパンガ村の若い男性グループ、スディ村の若い女性グループ）。また、調査に関わったファシリテーターに儀礼批判の誘導も垣間見られたため、実際以上に、儀礼が開発を阻害する文化の例として強調されている可能性が高い。

20グループ中4グループが、女性の権利に害を及ぼす具体的な例を、「文化」が開発を阻害する例として挙げた。ムベケニェラ村の年配の女性は、妻が夫の死後、土地を相続できないことが問題であると強調した。ナイパンガ村の若い女性は、女性が農業労働をするにもかかわらず、換金作物から得られる所得を得られないことを、問題視した。この点は、アフリカで一般的に見られる「女性が食糧生産・男性が換金作物」という性差分業に対して、この地域では、必ずしも女性が満足していない例を示した。ナイパンガ村の年配の女性は、女子が教育を受けることに対して差別を受けることについて述べた。ルタンバ村の若い女性は、昔、「妊婦が卵を食べると剥げた子どもが生まれる」という迷信のため、卵を食べる事を禁じられていたことを述べた。インタビューの自由回答の質問では、女性の権利が剥奪されている様々な内容の例を「女性の権利」に関連するものとして累計すると、二番目に最も頻繁に挙げられた。インタビューにおいて、先行研究で述べられている「女性の権利」の迫害といわれている例の評価を求めたところ、選択式の質問に対しては、全て「悪い」習慣であると評価されていた。

「過剰な飲酒」はグループ討論で挙げられ、インタビューにおいては、最も頻繁に述べられていた。呪術は、インタビューにおいて、単独の回答として二番目に最も頻繁に挙げられていた。ムチンガ・ムビリ村の年配の男性によると、伝統的な医療の役割は、呪いを解くことである。この説明は、呪術と伝統的医療の明確な区別（Wembah-Rashid 1974）や、多様な伝統的医療が存在すること（L. Swantz 1990）[5]を考慮すると、注意深く解釈する必要がある。本調査の大グループにおける討論において、伝統的な医療が行なわれていない、と強調するものもいた（ルタンバ村）ことに見られるように、村人は必ずしも伝統的医療が行なわれていることを明言しない傾向がある[6]。これは、独立後の西洋的な保健医療サービスの拡大による影響として、伝統的な医療が「恥ずべきもの」と位置付けられた、と解釈できる。インタビューにおいては、多くの人々が保健医療の拡大を高く評価していた。保健医療サービスの変化に気がついた210名の有効回答のうち、138名は「良い変化」であると評価し、52名は「悪い変化」である、7名は「どちらともいえない」と答えた。「悪い変化である」という評価は、主に、有料化が理由であった。ナイパンガ村では、年配の男性のグループが、女子割礼・呪術・過剰な飲酒など様々な例を、「文化」が開発を阻害する例として当初挙げた。しかしながら、彼らはこれらの例は実は昔と比較して増えており、必ずしも文化から起因するとは限らないと結論づけた。

(c) 開発と文化の対立例その２：文化を害する「開発」

「開発が文化に害を及ぼす可能性があるか？」という質問に対して、20グループ全てがその可能性はあると答えた[7]。

村人が最も恐れた「開発」は、外国文化の輸入であった。ビデオ（特に成人向けビデオ）・テレビ・ディスコは、若者の心をつかみ、文化にとって有害であると20グループ中8グループが主張した。ナイパンガ村の年配の男性は、若者が、儀礼で行なわれる太鼓や踊りではなく、ビデオを見ることを好む事に落胆していた。外国文化に関連した例としては、（ビデオなどに影響され）女性が肌や髪

[5] L. Swantz (1990) は、伝統的医療に従事するものとしては、呪術を解く waganga、精霊を守る mzimu、伝統的な薬草を売りに分類した。

[6] M. Swantz (1970) も、大学生の質問に対して、事実に反して「西洋医療しか使わない」と村人が答える傾向があると観察した。

[7] この例に関しては、インタビューの項目にもれていた為、インタビューによる確認は行なっていない。

の毛の色を変えること（20グループ中6グループ）や、女性がミニスカートやズボンを履く、（海岸沿いの村においては）頭を覆わない、男性がイアリングをするなどの「敬意のない服装」をすることであった(20グループ中3グループ)。開発を推進する視点を持つ場合、何が開発を影響するかに焦点をあてがちであるが、村人は、何が文化を影響するかにも関心があり、「開発」に伴い入ってくる外国文化に関して、脅威を感じていた。

「教育」は、文化を影響する例として挙げられた（20グループ中2グループ）が、その評価は異なった。ルタンバ村の年配の男性グループは、長く教育を受けすぎると文化を忘れると指摘したが、ムチンガ・ムビリ村の年配の男性グループは、教育を受けることによって、文化の良い部分と悪い部分を選択することができ、文化を改善する可能性があると主張した。前者は、開発と文化の対立例として教育を認識していたが、後者は開発と伝統的文化の橋かけとしての役割を教育に見出していた。ナイパンガ村の若い女性は、開発そのものによって文化の「良い」部分を選択できると主張した。またルタンバ村において文化が阻害要因となりえないと主張した年配の女性たちも、教育の利点を認識していた。

Ⅳ．地域・ジェンダー・世代

開発と文化に関する意識には、地域・性別・年齢に基づく違いが明らかであり、自然・社会環境によってその認識差が形成していると考えられる。

地域間の意識差

地域による差は、村と村の間、海岸沿いと内陸の間、農村と都市の間で見られた。

「農業」を開発と文化の重要な例として選んだのは、5つの村のうち2つの村に集中した（ムベケニェラ村3グループとムチンガ村2グループ）。この点は、インタビューにおいては必ずしも確認できなかったが、グループ討論に基づくと、これらの村では、農業が文化に根ざした方法で行われている可能性も推測される。どの程度農業を中心として内発的発展がムベケニェラ村とムチンガ村において実現しているかについては、今後更なる調査を必要とする。

イスラム教の影響が強く集落として歴史の長い海岸沿いの村と、より柔軟なイスラム教徒（場合によってキリスト教徒も含む）[8]の集落として歴史の短い内陸の間では、意識のギャップが存在した。海岸沿いと内陸との最も大きな違いは、女性の権利に関する議論であった。海岸沿いの女性は、女性の権利迫害に関する例を、文化が開発を阻害する例として挙げなかった。このことはグループ討論だけでなく、インタビューにおいても確認された。この結果の解釈は二通りありうる。第一に、海岸沿いでは実際に女性の権利が迫害されていないという解釈である。第二に、海岸沿いでは、女性の権利が迫害されているにもかかわらず、それを主張させない社会的圧力があるという解釈である。筆者は、実際海岸沿いにおいて、要請にも関わらず女性の調査への参加者が男性の参加者を下回ったことや、グループ討論における観察から、後者の解釈が現実に近いのではないかと考える。

内陸と海岸沿いでは、文化を害する「開発」の例も異なった。双方とも、外国文化に関連するものであったという点では共通していたが、内陸ではビデオ、海岸沿いでは外国のファッションが問題となっていた。解釈としては、内陸では生産的な時間を奪うビデオが問題となっており、「敬意のある服装」が重んじられる海岸沿いでは外国のファッションがより大きな問題として現れていたといえる。

農村と都市の意識の差も見られた。都市（リンディ都市部とダルエスサラーム市）の住民に対するインタビューによると、開発と文化の調和例としては、結婚式が最も頻繁に挙げられた。他方、開発を阻害する文化の例としては、女子割礼が挙げられていた。この結果を農村の結果と対比させると、農業と、ジャンドやウニャゴなどの成人儀礼の議論は、農村部の地域性に根ざした例であるといえよう。

男女間の意識差

農業を、開発と文化の調和例として挙げていた

[8] 但し、いずれの場合も、伝統的な信仰が基盤にあり、成人儀礼を重視する世界観を支えている。

のは、性別で見ると男性の方が多かったことが、グループ討論及びインタビュー双方にて確認できた。グループ討論において、農業を最も重要な開発と文化の調和例として挙げたのは、男性５グループと、女性２グループであった（ムベケニェラ村、ムチンガ・ムビリ村）。この差の原因としては、二点考えられる。第一に、農業に従事する時間が、男女で異なる。一日の活動を、老若男女それぞれのグループで報告してもらったところ、男女とも農業に従事するが、女性は家事をするためにより遅く畑に行くか、より早く畑から帰ってくる[9]。第二に、女性が換金作物で得る所得を手にすることが少ない事が考えられる（ナイパンガ村の若い女性グループ）。関連して、女性グループ（例えば、ルタンバ村の年配の女性グループ）は、グループを形成して野菜を栽培する重要性を強調したが、この点については、妻が夫から財を守る戦略としてとしての報告（M. Swantz 1998）と一致する。

他方、グループ討論では、儀礼を、より多くの女性が、開発と文化の調和例と考えていた[10]。更に、より多くの男性グループが、儀礼を開発の阻害要因と考えており、この点は、インタビューにおいても同様の傾向が確認できた。この差は、女性がウニャゴに感じている認識と、男性（特に若い男性）がジャンドに対して感じている認識とが、異なっていることを示す。この傾向は、以前、女性が「文化」に基づいたグループをきっかけに社会統合を試みていると報告されたこと（Mbilinyi et al. 1999）を裏付けるものである。

女性グループのみが「女性の権利を迫害した文化的慣習」の例を、開発を文化の阻害要因としての最も影響のある例として挙げた。男性グループの中では、スディ村の年配の男性が、一夫多妻制を一例として挙げるにとどまった。女性のみが「女性の権利迫害」を問題とするこの傾向は、インタビューにおいても確認された。また、この傾向は、タンザニア各地で行われたPRSPの協議において、伝統的な慣習が女性の権利を妨げ貧困の原因となっているという報告を、男性と比較して女性が多かったと記録したこととも一致する（Tanzania 2000a, b）。

文化に害を与える「開発」の例として、より多くの女性が、外国由来のファッションを挙げた（女性６グループに対して、男性３グループ）。他方男性は、ビデオやテレビなどの弊害の例が多かった（男性６グループに対して、女性２グループ）。外国のファッションに関する批判は主に女性のファッションを対象にしていたのに対し、ビデオは男性が中心に鑑賞していたものであるということを考えると、同性の動向に関する注目・批判の方がより多いことが見受けられる。

世代間の意識差

最も大きな世代間ギャップが見られたのは、ジャンドやウニャゴに対する認識であった。一般的に「儀礼」を例として挙げていた例に、大きな世代間の差はなかったが、成人儀礼のジャンドとウニャゴを挙げていた例には、認識に明らかな世代間のずれがあった。開発と文化の調和例として挙げていたのは、年配グループが３グループ（男女のグループそれぞれ含む）に上ったが、若年グループは１つ（女性グループのみ）に留まった。他方、開発の阻害例として挙げていたのは、年配グループ（男性グループ）１グループのみであったのに対して、若年グループは７グループ（男女のグループそれぞれ含む）に上った。この傾向は、インタビューでも確認された。

年配の男性や女性は、若い男性や女性と比較すると、集団による協同を重視する傾向が多少あった。３つの年配のグループ（男女含む）は、集団農業を、開発と文化の重要な調和例として挙げたのに対し、若いグループは、ムベケニェラ村の若い男女２グループのみであった。更に、スディ村の年配の女性は、開発のための効果的な方法として、相互扶助を強調していた。リンディ州においても、多くの社会で見られるように、若者が比較的個人主義の傾向がある。

ビデオやファッションなどに代表される外国文

[9] 4村（ムベケニェラ村、ナイパンガ村、ルタンバ村、スディ村）の平均として、女性は、乾季に2.9時間、雨季に6.3時間の農作業を行い、男性は、それぞれ6.9時間と8.6時間農作業を行っている。女性は農作業の他に乾季に8.9時間、雨季に5.1時間家事を行っている（男性は行なっていない）。但し、この場合、換金作物を中心とする農業を行う畑(shamba)と、自給のための食糧を育てる庭園(bustani)と区別し、庭園ですごす時間が畑での農業に入れず家事に分類されている可能性もある。

[10] この点は、インタビューにおいて確認できなかった。

化の弊害については、地域・年齢を越えて認識されていたが、年配の男性がより強調していたように感じられた。ナイパンガ村の年配の男性は、子供や若者が、伝統的な儀礼に参加したり、祖父（母）と話をするよりも、ビデオやテレビを見たり、ディスコに行ったりすることを好むことを嘆いていた。これは、ルタンバ村で、子供（特に男の子）が、農業や家事に非協力的である、と苦情を述べていた親の発言とも関連している。老若男女別の一日の活動表を見ても、若い男性は、他の年齢や性別よりも、ビデオなどの余暇につかう傾向が明らかに多かった[11]。

V．結論

グループ討論とインタビューの結果、開発と文化の関係は、調和している場面と、対立している場面と、視点によって様々であり、特に地域・世代・ジェンダーによって異なっていたことが明らかになった。

農業の例は、開発と文化の調和の例として最も頻繁に挙げられ、内発的発展の可能性の高い分野といえる。この点は、これまでのアフリカにおける農業及び文化人類学の研究が注目してきた在来農業を見直す試みと呼応する点であるといえよう。しかし、その例が、一部の地域においてのみ強調されていたとともに、その強調されていた特徴は性別によって異なっていたことは、注目すべき点であり、ジェンダーに基づく分業に対する意義申し立ても存在した。

他方、儀礼（ngoma）－特に成人儀礼であるジャンド（jando）とウニャゴ（unyago）－は、開発と文化の調和例であると同時に、対立例として示された。この軋轢は、年長者による儀礼を通じての内発的発展と、若い男性によって強調されていた近代的な開発の目指す将来像の世代間ギャップから、生まれていると考えられる。

女性は、老若問わず女性の福祉に関連する発展を阻害する伝統的な文化的慣習の例を挙げたが、男性はこの点については彼らの「文化」の定義を盾に沈黙を守った。女性たちは、この硬直状態を打破し、彼女たちの状態を改善する静かな戦略として、開発及び文化に関連するネットワークを活用していた。

これらの例は、文化を基盤とする人々の生活が、外発的な開発の波と鬩ぎあう姿を映し出しているといえよう。また、農村に暮らす人々は、農業と儀礼に内発的発展の可能性を見出しているが、その視点は、地域・世代・ジェンダーに基づき形成されており、その実現のためには、年齢・性別による多様な主体の相互認識と対話と、地域の特徴を生かした発展路線の模索が不可欠である。

[11] 4村（前述）の平均として、若い男性が娯楽や休憩に乾季には5.2時間、雨季には3時間過ごしているが、若い女性はそれぞれ1.5時間と1.3時間、年配の女性は1.8時間と2時間、年配の男性は0.5時間と1時間過ごしている。また、若い男性のみ（ムベケニェラ村及びナイパンガ村）が、ビデオ鑑賞を娯楽の一日の生活の中で特定して示した。

付　記

本研究は、早稲田大学特定課題「Culture and Social Development」（個人研究 2001A-624）の助成を得た。

本研究に協力して下さったリンディ州の村人、及びご指導下さった西川潤教授に深い謝意を表したい。

参考文献

Hammarskjöld, Dag Foundation. 1975. "What now? The 1975 Dag Hammarskjöld Report" (prepared on the occasion of the seventh special session of the United Nations General Assembly), *Development Dialogue* Nos. 1-2.

Hyden, Goran. 1980. *Beyond Ujamaa: Under-development and an uncaptured peasantry*, University of California Press, Berkeley.

掛谷誠編 . 2002.『アフリカ農耕民の世界—その在来性と変容』京都大学出版会 .

Mbilinyi, Marjorie, Bertha Koda, Claude Mung'ong'o, & Timothy Nyoni. 1999. *Rural Food Security in Tanzania: The challenge for human rights, democracy and development*, Institute of Development Studies (IDS), Rural Food Security Policy and Development Group, University of Dar es Salaam.

Mesaki, Simeon. 1999. "Near and Yet So Poor: Explaining Underdevelopment in the Coast Region of Tanzania", in Forster, Peter G. and

Maghimbi, Sam (Eds.), *Agrarian Economy, State and Society in Contemporary Tanzania*, Aldershop, Ashgate.

Narayan, Deepa. 1997. *Voices of the Poor*, The World Bank, Washington, DC.

Nyerere, J. K. 1966. *Freedom and Unity*, Oxford University Press, Dar es Salaam.

Nyerere, J. K. 1968. *Freedom and Socialism*, Oxford University Press, Dar es Salaam.

Putnam, Robert D. 1993. *Making Democracy Work: Civic traditions in modern Italy*, Princeton University Press, NJ.

Sakamoto, Kumiko. 2003. *Social Development, Culture and Participation: Toward theorizing endogenous development in Tanzania*, PhD thesis, Waseda University.

阪本公美子 . 2004. 「タンザニアにおける「貧困」の歴史的形成—スワヒリ文化に対する潜在的偏見を超えて—」『混迷する国際社会と共生へのビジョン』 宇都宮大学国際学部 , pp.115-136.

Sakamoto, Kumiko. 2004. "Moral Economy and Endogenous Development: From people's diverse perspectives of *utamaduni* (*culture) & maendeleo* (development) in south-eastern Tanzania", *Tanzania Journal of Population Studies and Development*, Vol.11, No. 2.

Scott, James C. 1976. *The Moral Economy of the Peasant: Rebellion and subsistence in Southeast Asia*, Yale University, New Haven, CT.

Scott, James C. 1998. *Seeing Like a State: How certain schemes to improve the human conditions have failed*, Yale University, New Haven, CT.

Shinyanga, the Regional Government of; IDS (Institute of Development Studies, Sussex); & UNDP (United Nations Development Programme). 1998. *Shinyanga Human Development Report*, InterPress (T), Tanzania.

Sokoine University of Agriculture and Kyoto University. 1998. *Integrated Agro-ecological Research of the Miombo Woodlands in Tanzania*. JICA.

杉村和彦 . 2004. 『アフリカ農民の経済—組織原理の比較』世界思想社 .

Swantz, Lloyd W. 1990. *The Medicine Man: Among the Zaramo of Dar es Salaam*, Scandinavia Institute of African Studies, Uppsala.

Swantz, Marja-Liisa. 1970. *Ritual and Symbol in Transitional Zaramo Society*, Almqvist & Wiksells, Uppsala.

Swantz, Marja-Liisa. 1981. "Culture and Development in the Bagamoyo District of Tanzania", in Peter Reason and John Rowan (Eds.), *Human Inquiry: A sourcebook of new paradigm research*, John Wiley & Sons, Chichester, England.

Swantz, Marja-Liisa. 1996. "Village Development: On whose conditions?", in Swantz & Aili Mari Tripp (Ed.), *What Went Right in Tanzania: People's response to directed development*, Dar es Salaam University Press.

Swantz, Marja-Liisa. 1998. "Notes on research on women and their strategies for sustained livelihood in Southern Tanzania", in Pekka Seppälä and Bertha Koda (Eds.), *The Making of a Periphery*, Nordiska Afrikainstitutet Uppsala.

Tanzania, United Republic of, Bureau of Statistics and Macro. 1997a. *Tanzania Demographic and Health Survey 1996*, Dar es Salaam.

Tanzania, United Republic of, the Planning Commission & Regional Commissioner's Office. 1997b. *Lindi Region Socio-economic Profile*, NPC-KUITA, Dar es Salaam & Lindi, Tanzania.

Tanzania, United Republic of, Vice President's Office. 1999. *Poverty and Welfare Monitoring Indicators*, Government Printer, Dar es Salaam.

Tanzania, United Republic of, Zonal workshops coordinating committee. 2000a. *Report on the Zonal Workshops on Poverty Alleviation that Included all Districts and Regions of Mainland Tanzania*, Dar es Salaam.

Tanzania, United Republic of. 2000b. *Poverty Reduction Strategy Paper*, Government Printer, Dar es Salaam.

Tanzania, United Republic of. 2003. *2002 Population and Housing Census: General Report*, Government Printer, Dar es Salaam.

鶴見和子 . 1996. 『内発的発展の展開』筑摩書房 .

UNICEF (United Nations Children's Fund). 1995. *The Girl Child in Tanzania: Today's girl tomorrow's woman*, Dar es Salaam.

UNICEF. 1997. *District Statistical Profiles*, Dar es Salaam.

Wembah-Rashid, J. A. R. 1974. *The Traditional Religion of the People of Masasi District: Ethnographic field research report* Occasional paper No. 1, National Museum of Tanzania, Dar es Salaam.

Wembah-Rashid, J. A. R. 1998. "Is Culture in South-eastern Tanzania Development-Unfriendly?" in Pekka Seppälä and Bertha Koda (Eds.), *The Making of a Periphery*, Nordiska Afrikainstitutet, Uppsala.

Harmonisation and Struggles between Development and Culture: Place, gender, and generations in Southeastern Tanzania

Kumiko Sakamoto

Abstract

Although Tanzania emphasized the importance of national culture in development visions, harmonization between development and culture is not visible in the present development debates that view culture as hindering development. This perspective is criticized as lacking understanding of people's manoeuvre to create their space, and neglecting the diverse agencies active in the local environment. This article re-examines relationships between development and culture from people's differentiated perspectives based on place, gender, and generations in order to understand the agencies in the context of "development" and "culture." Through group discussions and interviews in Lindi Region, typically considered as a "poor" region in Tanzania, strategies of women and men, young and old, utilizing concepts of development and culture toward outsiders and amongst villagers are identified. Development agents need to recognize the power of people's culture and diversities of agencies within the local environment to promote endogenous development based on ownership of the people.